地域の歴史を深堀する
代官山ステキサロン＆懇親パーティ

320年間、代官山エリアを流れていた三田用水の概要

2016年９月21日（水）
講演会開演６：30
懇親会８：00
終了予定９：00頃

NPO法人代官山ステキ総合研究所

一部：講演会・ステキサロン(敬称略)

1、 三田用水史略　　　木村　孝　　　地域史家・弁護士

三田用水やその前身、三田上水と細川上水を国立国会図書館など蔵の絵図などをベースに解説。これまで膨大な三田用水関連資料を蒐集した動機、経過、結果の概略をお話しいただきます。また、三田用水研究の先行事例。さらに現状と今後の研究課題についても触れていただきます。

1、 近代文学の空間としての三田用水　きむらけん　　文化探査者・作家

風景や地形的な観点で三田用水を物語的視点で捉えてみようという試みである。日々近郊の荏原を歩き、都市荏原に眠る多くの物語を掘り起こしている。

二部：懇親会・懇親パーティ
司会：藤森高司（DSI）

・・

開会挨拶

岩橋：ステキ総研の代表・岩橋です。

ステキ総研の岩橋です。代官山の三田用水について、古くからの住民の方は知っていますが、若い人や新住民の方はほとんど知らない。この貴重な地域資源を知らないのはもったいない。また、今後2020には4000万人の海外観光客が来日します。多くの方は渋谷の新しいビルの屋上からスクランブル交差点を見て帰ってしまいます。しかしそのすぐそばに、東京の基盤である江戸＝東京をつなぐ、三田用水が静かに眠っているのです。

本日は三田用水に縁のある方、関心のある方々が寄り合って学び、話し合うことが大切ということで、地域の歴史を深堀する「代官山ステキサロン＆懇親パーティ」を企画いたしました。大きく一部の講演会と二部の懇談会となっています。

限られた時間です。早速、第一部の講演会を始めましょう。
それでは木村孝さんお願いいたします。（以下敬称略）

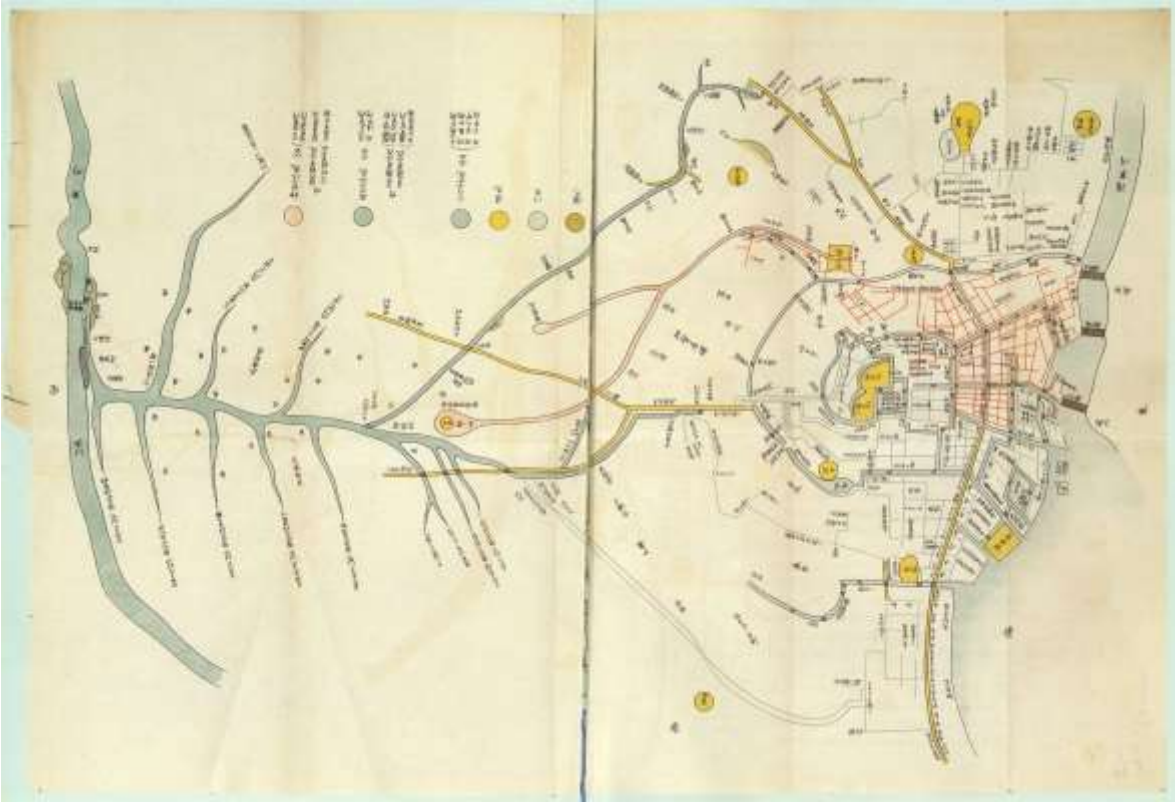
一部：講演会・ステキサロン

１、三田用水史略　木村孝

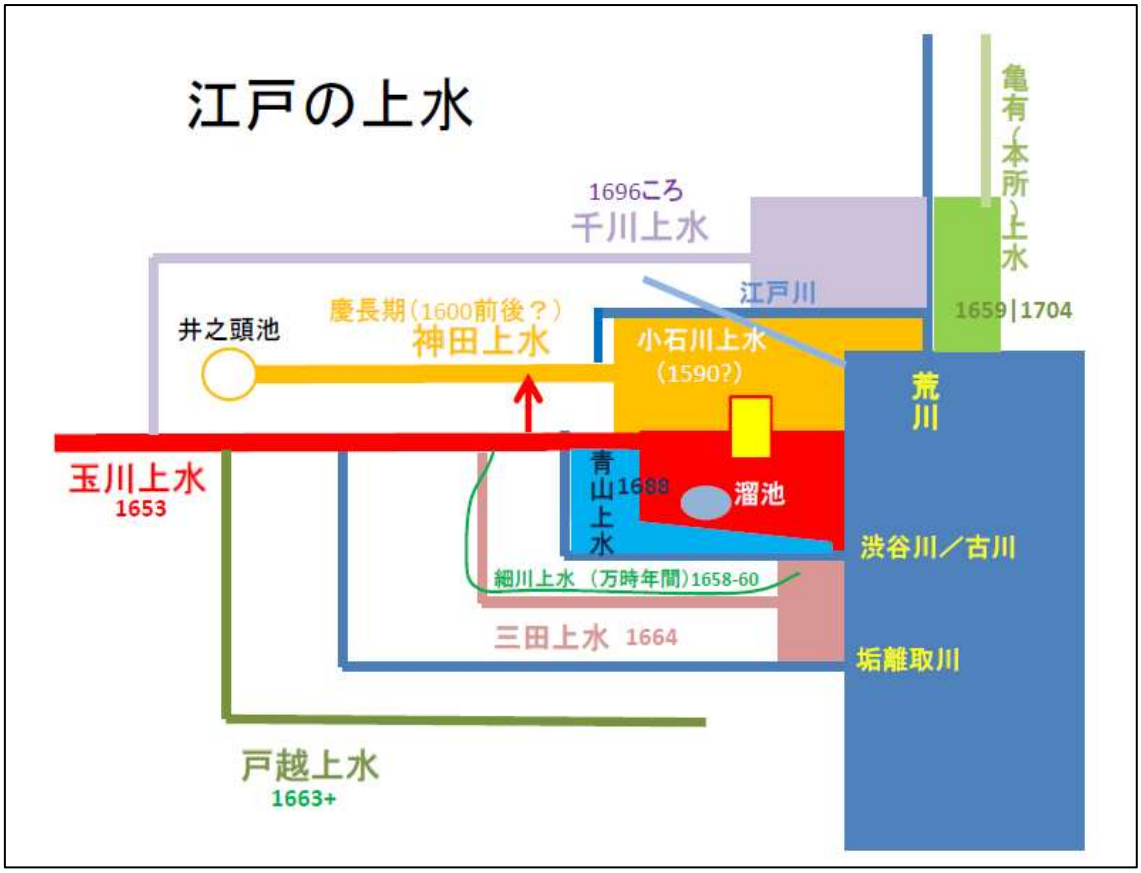
木村孝です。三田用水の笹塚から高輪、白金２丁目までの全長 8.5km. 310 年（300 年以上）にわたる歴史をコンパクトにお話しします。

１、江戸の上水／用水の概要

「上水図」　伝・正徳年間（1711-1715）

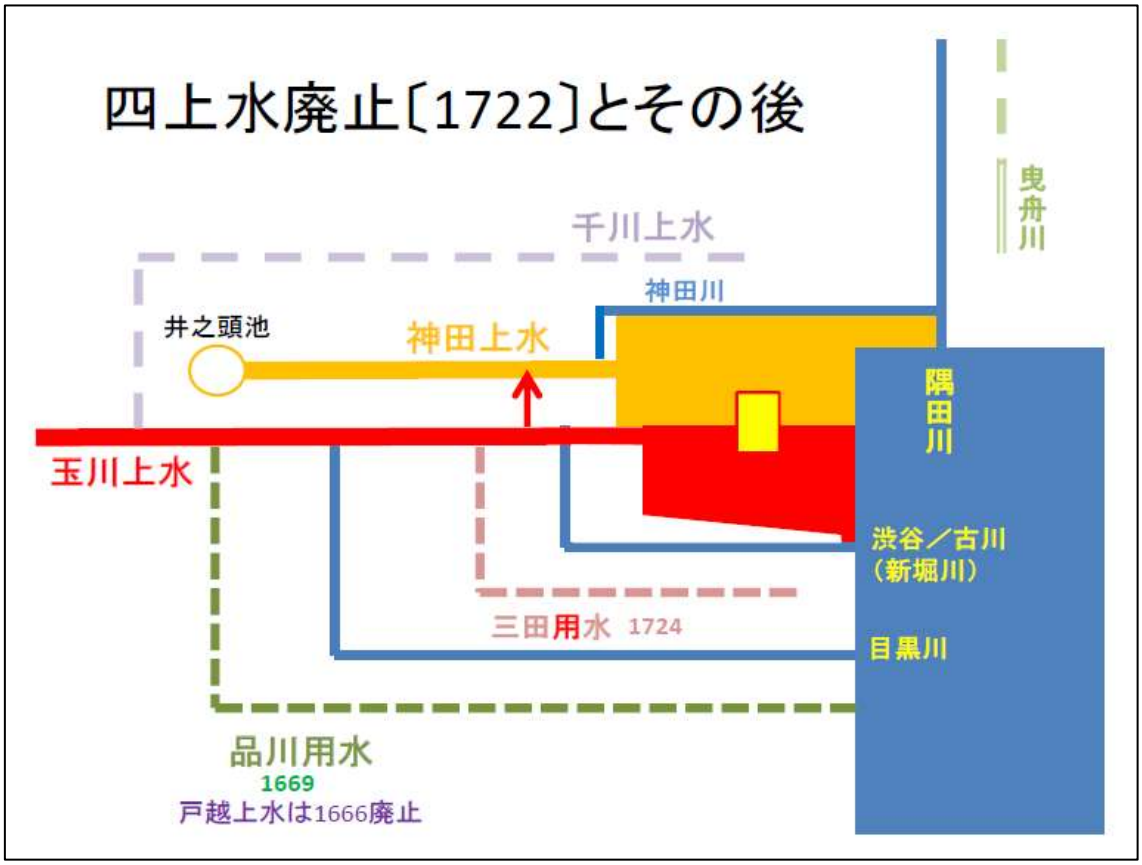


これは、玉川上水、その分水、江戸市街の水路網を描いた絵図です、略図にすると、以下のようになります。



家康の江戸入り当初は小石川上水と赤坂溜池の水でまかなおうとしたようだが、人口が増え神田上水が引かれた。さらに人口が増え市街地が広がったので、「玉川上水」が引かれ、さらに 1664 年の「三田上水」などの分水が引かれた。

しかし、1722 年のいわゆる四上水廃止の一環として「三田上水」も廃止となった。その後、沿川農民の嘆願により、1724 年に「三田用水」として復活する。



上水と用水の違いは、原則として、呑水は上水、農業用水が用水。実際には、区分は厳密ではない。上水は台地や稜線上部のいわば凸水路が多く、自然河川を利用した凹水路は周辺からの水が入っても構わない用水に多い。地表面の勾配は一定ではないので、とりわけ凸水路の場合は調整が必要で、その高低差を克服するため、ほっこ抜き（トンネル）、築樋（土手）、懸樋（水路橋。かつて槍が崎にあった）、伏樋・潜樋（逆サイフォン。白金妙円寺前にあったようである）などの手法を使った。

両「上水時代」

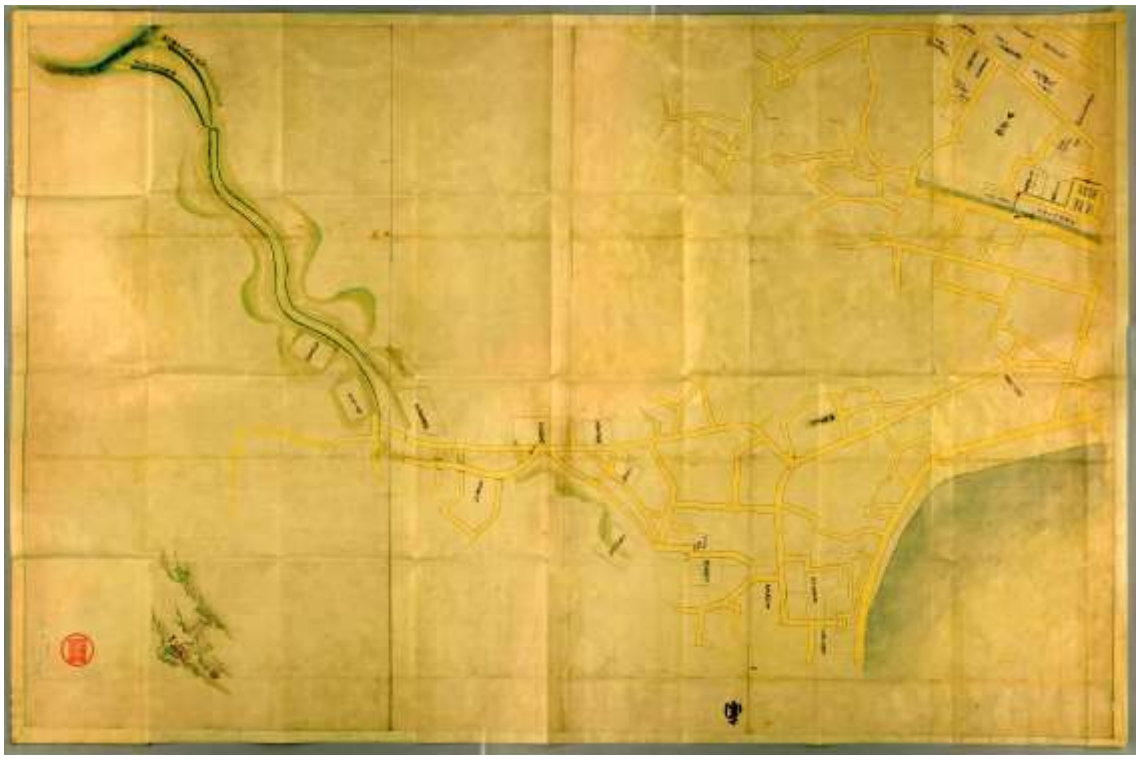
三田上水開鑿時には、少し先行して肥後細川家が開鑿した細川上水という水路があって、2つの水路はほぼ並行して流れていた。その当時の絵図も残っていて、国会図書館のデジタルライブラリで入手できる。

「芝目黒辺絵図」　国会図書館蔵

http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542078　の各図を接合

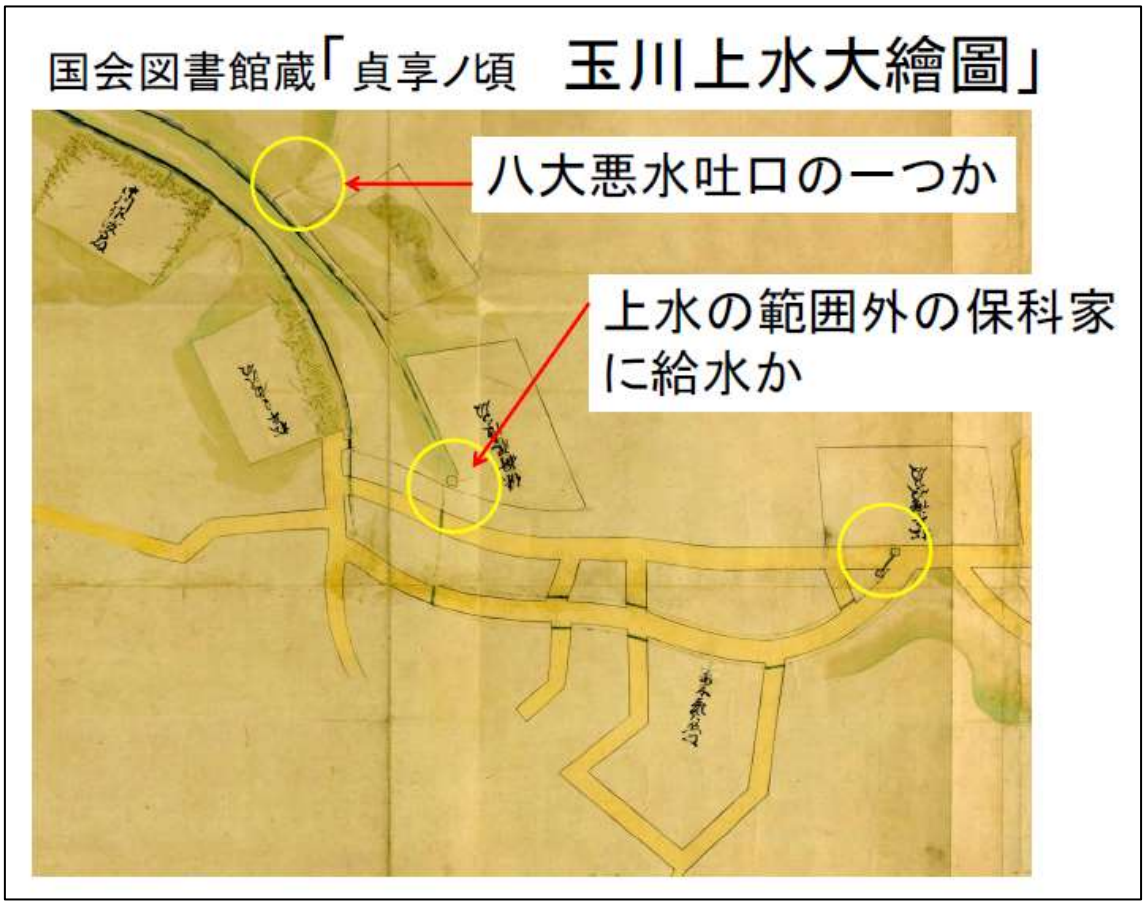
かなり大ざっぱな図だが、旧幕府から新政府への引継文書、ということは旧幕時代にはそれなりに重要な図面だったということになる。図の左下には、後から書き足したりした跡があり、いわば「実用」されていたようである。左上隅の玉川上水から、上流側で分かれているのが三田上水、下流側で分かれているものが高輪の細川越中の屋敷に引かれている細川上水で、２か所で両者がクロスしていることがわかるが、次の貞享期の図とは、そのクロスの位置などが微妙に違っている。

「貞享ノ頃玉川上水大繪圖」国会図書館蔵　（貞享年間=1684-1687年）



http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2589442　の各図を接合

この図も「両上水時代」のものだが、今の目黒駅辺りの部分を抜粋して拡大してみる。



この図には、三田上水の水路沿いにある大名屋敷の一部だけが書かれている。何か訳あってわざわざそれだけが書かれているのではないかと思われる。上水の本来の配水地区の

範囲外にある保科家に給水しているように見える枡や水路らしきものや、八大悪水吐口と呼ばれる余分な水を途中で排水するための分水路らしきものも描かれている。これにも、既存の書き込みの塗りつぶしや書き換えの跡がある。

http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2589456　の各図を接合

この図は水路が１筋なので三田用水時代、安政４（1857）年７月に設けられた「合薬製方水車地所」が描かれている〔註：上部中央〕ので、幕末間近の図とわかる。それまでこの場所は将軍家の雉狩場であった。中を水路が通っているのだが、大名屋敷と同様、白塗りになっている。

こういった玉川上水から三田用水への分水図のほかにも、三田用水からの分水図として「三田用水絵図」（品川用水図の一部）もあるが、あったはずの橋を上流側から順次当てはめていくと数が合わなくなってしまったりするので、あまり、あてにはならないと考えている。

2. 三田用水に関する主な先行研究と資料（配布資料参照）

先行研究としては、近世から現代までの約 320 年という時間、笹塚から高輪までの約 8.5 キロメートルという空間の中の、様々な時期や地域にかかわるものがある。

田原光泰（白根記念渋谷郷土博物館学芸員）研究：現代期の渋谷区内の三田用水の分水とその変化・消滅過程
著作：「春の小川はなぜ消えたか」之潮　平成 23 年

小坂克信（産業考古学会理事）研究：
三田用水（と千川上水）の日本の近代化への貢献
著作：「日本の近代化を支えた多摩川の水」2012 年、他
三田用水関係では、主に海軍火薬製造所と大日本麦酒を探る
<http://www.tokyuenv.or.jp/wp/wp-content/uploads/2011/12/d5dee0a2422f6d5ba003d7be3dad345a.pdf >

牧寛（慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了・横浜市職員）研究：
旧三田用水の文化的景観の歴史的変遷と再生に関する研究
2010 年　第 6 回フォーラム代官山資料
従来の『線』〔用水路〕から『帯』〔渋谷川と目黒川に挟まれた地域〕に視点を広げた

3. 新たな研究

どんなテーマが考えられるか。どんなテーマが眠っている／眠っていそうか？

テーマ例 1：「水車史」から用水史・産業史を探る

水車は、近世では春米〔しょうまい〕・製粉用だったものが、近代になると製綿、撚糸、組紐製造、製薬、黒鉛製造、針金製造など軽工業用途にも使用されるようになり、三田用水沿いは、いわば東京近郊初の工業地帯になった。その後工業地帯は大崎方面に移動したが、そこでも用水の工業用利用が拡大されていったという歴史がある。

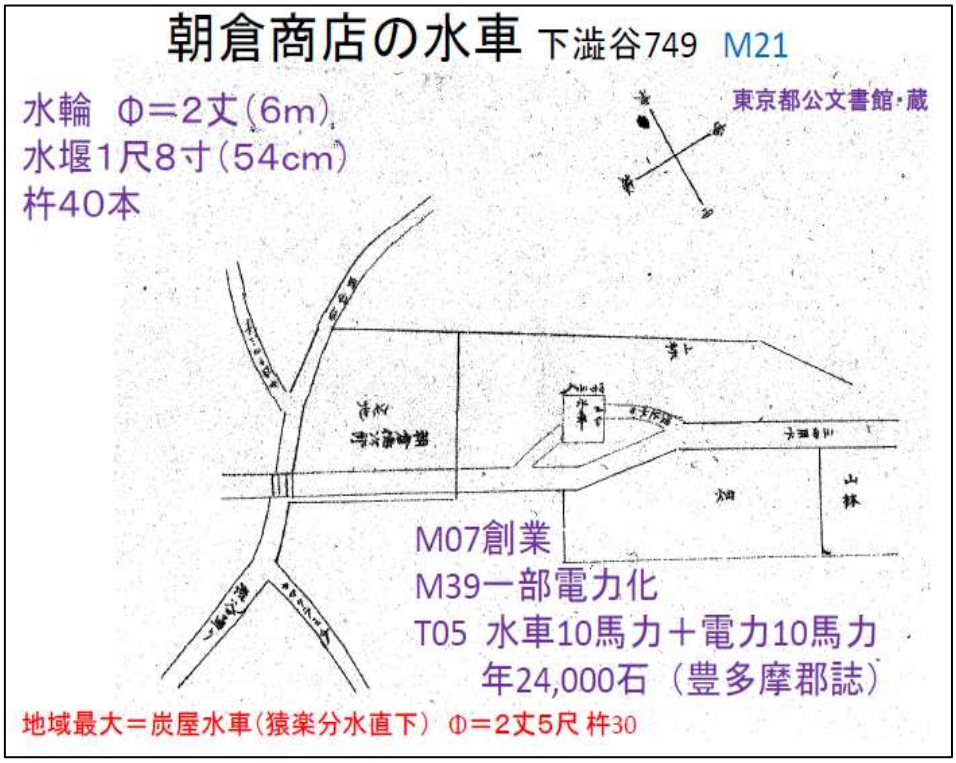
近代初期の三田用水から渋谷川・目黒川にかけては、いわば水車銀座だった。角谷製綿

所の水車（錦絵）・朝倉商店（水車免許更新時の申請図）などがその記録として残っている。
　なお、地域最大のものは炭屋水車（猿楽分水直下）で、直径が 2 丈 5 尺（7.5 メートル）の水輪で杵 30 本を動かしていた。

角谷〔すみや〕製綿所の水車（左）　中澁谷 492　直径 2 間（3.6m）　大正 05 年 10 月廃業

明治 30 年ころ

この朝倉虎治郎商店の水車は下渋谷 749 番地にあり、大正期の地図をみると、



そのあたりに用水路から 3 つの水路の分岐が読み取れる。

先の東京都公文書館蔵の図からみて、このうちの上 2 つは、一旦三田用水から分水された水が、水車を回した後再び用水路に戻されていることを示していることになる〔上図青点線〕。3 つめの分水路は、方向から見て旧朝倉邸の庭に引かれていたように見える〔上図赤矢印〕。

こういった水車は、やがて蒸気機関や電力にとって代わられたが、組合の収入費目と内訳の変化（「江戸の上水と三田用水」p. 147-176）からも、その盛衰の経過が読み取れる。

〔参考資料〕

組合の収入費目と内訳の変化

「江戸の上水と三田用水」pp.102～113／pp.147～176

・反別割　（組合各村の分担金）　実質：水代
　農地の消滅　→昭和9年以降廃止

・用水使用料（組合村以外の水使用者が払う料金）　実質：水代
　上水道の普及（玉川水道 T07～）
　大深度井戸（Ex.三共(品川)　少なくともT13までに400尺の井戸2本）
　工業用水（庭園用もS07で4件）　→消滅
　佑次郎氏15円、徳次郎氏10円

・水車約束金（水車の水の使用者が払う料金）　実質：エネルギー使用料
　明治中期：総収入の約60%　電力の普及　→大正期に消滅

・架橋用水路使用料（用水に橋を架ける者が払う料金）　実質：地代
　T02：10件106円／S07：37件506円　宅地化　→件数増加

・堤塘及水路使用料（自分の水を用水路を使って送水する者が払う料金）
　実質：送水手数料
　？虎次<ママ>郎氏10円
　北白川宮家・毛利家・（伊藤→）岩崎家
　水利権返上　→消滅
　大日本麦酒、海軍→陸軍火薬製造所→海軍技研
　→存続

テーマ例２:「各論的・具体的景観を探る」

錦絵の「名所」はなぜ「名所」だったのか

富士が見えるだけではほとんど江戸中がそうなのだから名所にはならない。見晴らしのよい場所があって下に水田や川が見え、その対岸の丘陵越しに富士が見えるというのが名所に共通している。

村尾嘉陵・江戸近郊道しるべ巻之十三　　文政3〔1820〕/03/04

http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2577954/9

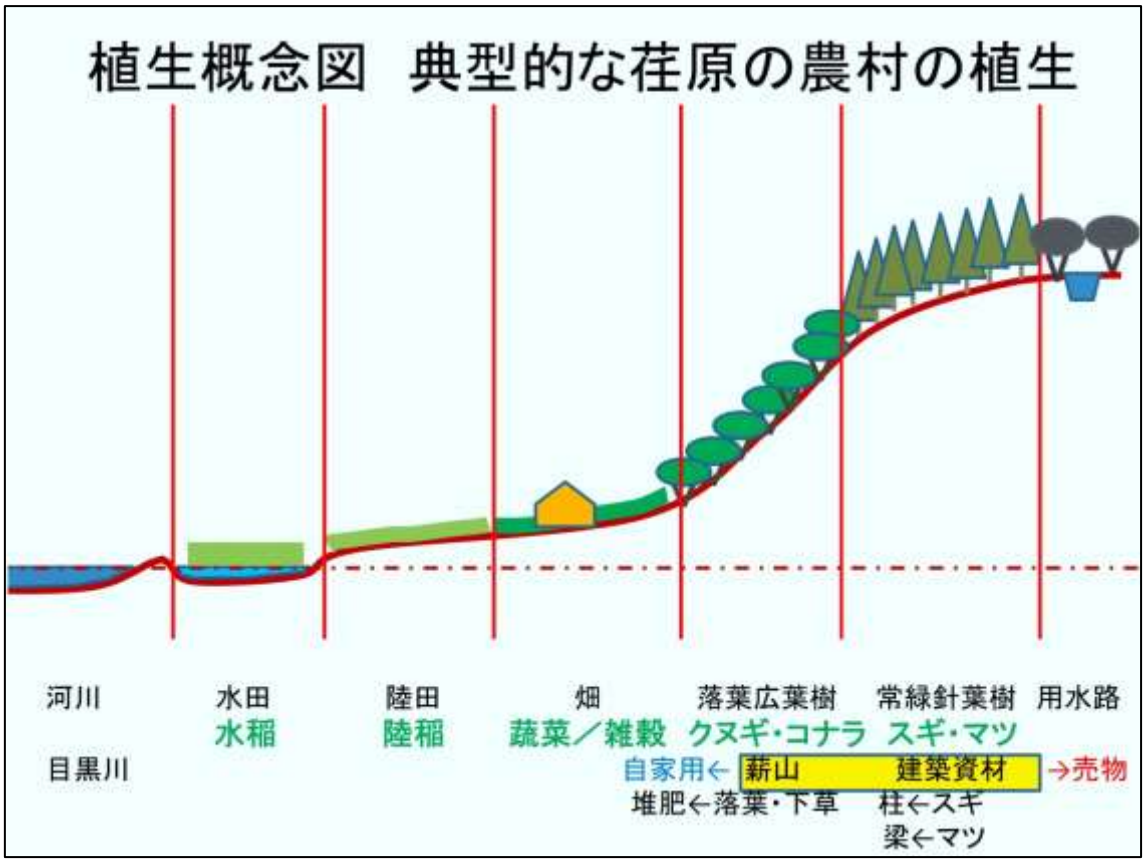
現に、他の富士塚がもっぱら信仰の対象だったのに対し、東西２つの目黒富士は麓に茶屋があったりして、むしろ景観を楽しむ場所としての性格が強い。

前同

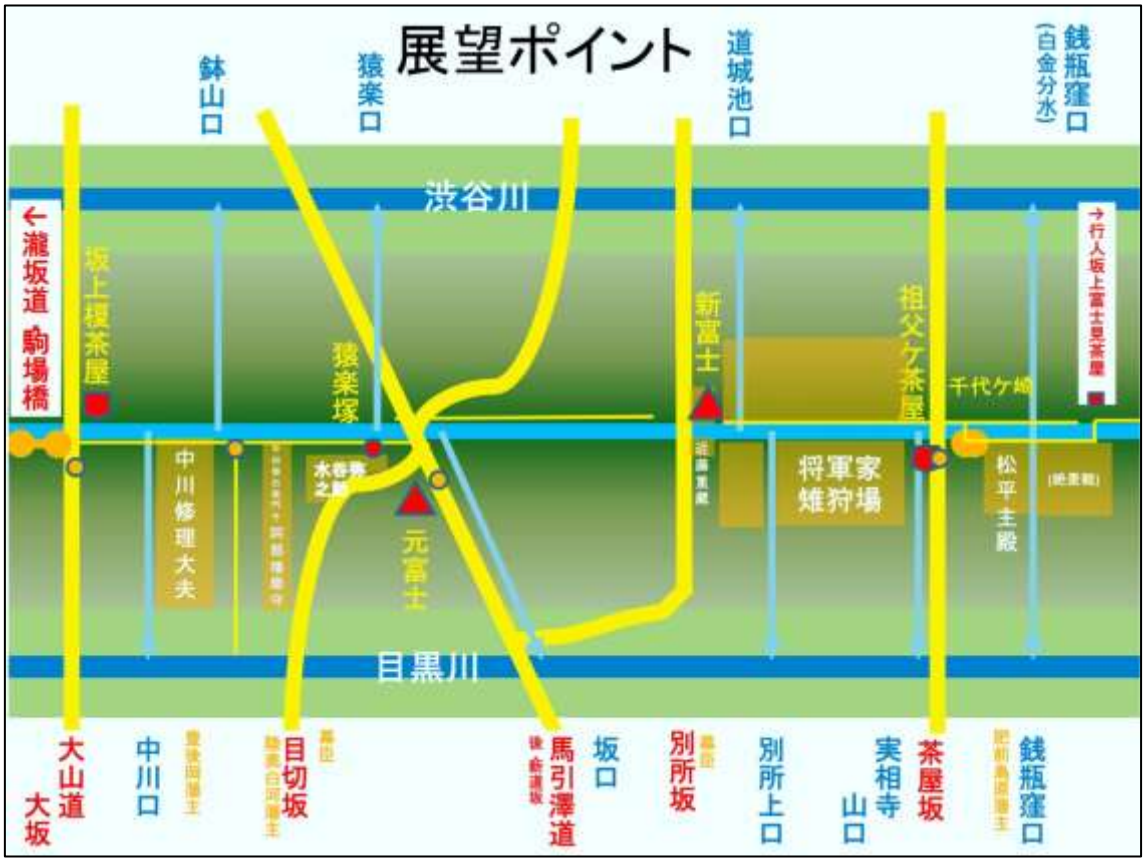
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2577954/8

そういった「名所」以外の場所では、下の植生概念図にあるような農村地帯共通の土地利用形態（河川から、田、畑、人家を経て、薪や堆肥用の落ち葉・下草をとるための落葉

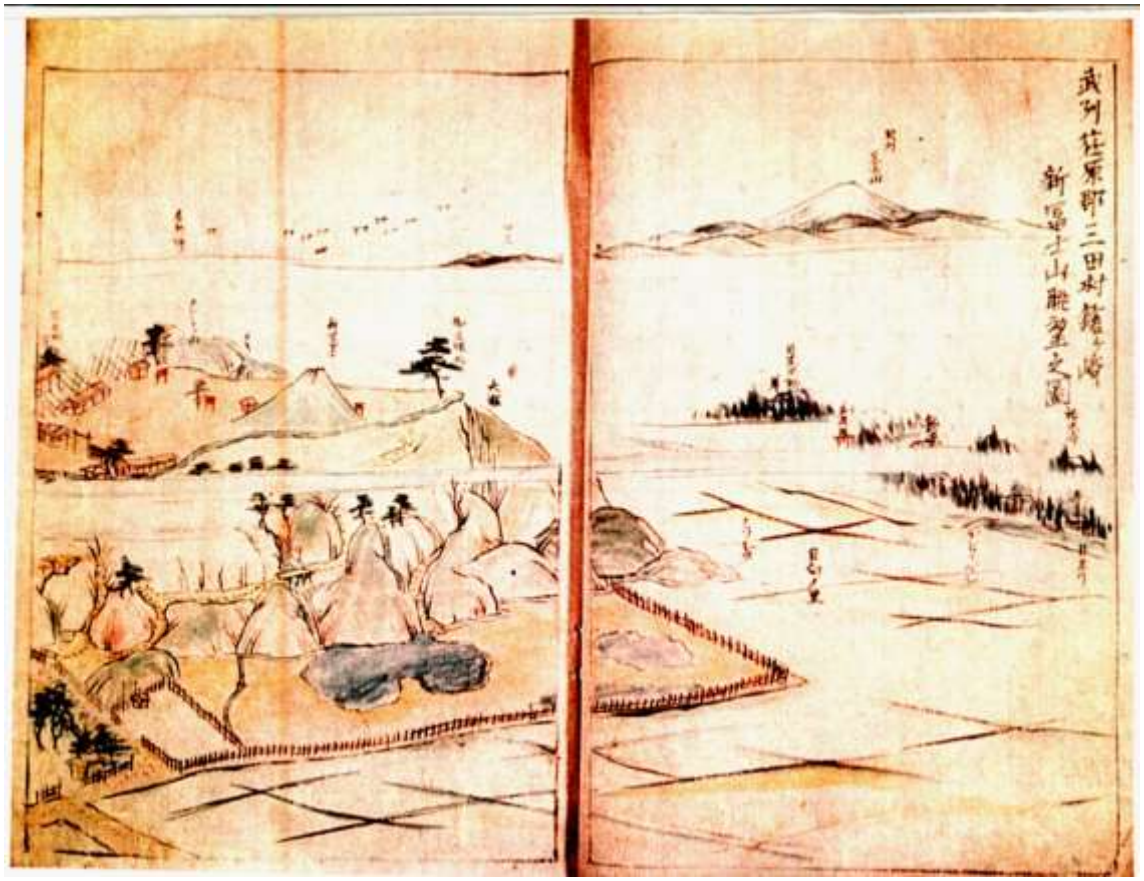
広葉樹林、さらに建築用の材木を得るための常緑針葉樹林へと標高に応じて植生を変化させている。用水路はその最高部つまり稜線にあった。）からみると、水路沿いの土手道から杉などの林越しに富士は見えるとしても、名所の条件の「見晴らし」を欠くことになる。



そのため、錦絵に描かれている、爺が茶屋、富士見茶屋などのある「峠」や、東・西目黒富士といった人工の高台が、当時でも数が限られた景観ポイントとして、価値が高かったといえる。



近藤冨蔵・「八丈実記」中「鎗崎實録」挿絵



文政 9〔1826〕年 5 月の「獄台の変」解説図

広重・繪本江戸土産「目黒爺ゝが茶屋」

広重・不二三十六景「目黒千代が崎」

「千代が崎」=「渋谷より目黒へ往還の芝生の岡をいふ」（繪本江戸土産の解説）

豊国＋広重２代目・江戸自慢三十六興「行人坂富士」

目黒行人坂上富士見茶屋前。左下が目黒川にかかる「太鼓橋」

テーマ例３：「地域史的観点から」
地域資料を時系列化し、いわば「猿楽『三田用水』雑記」を編む。

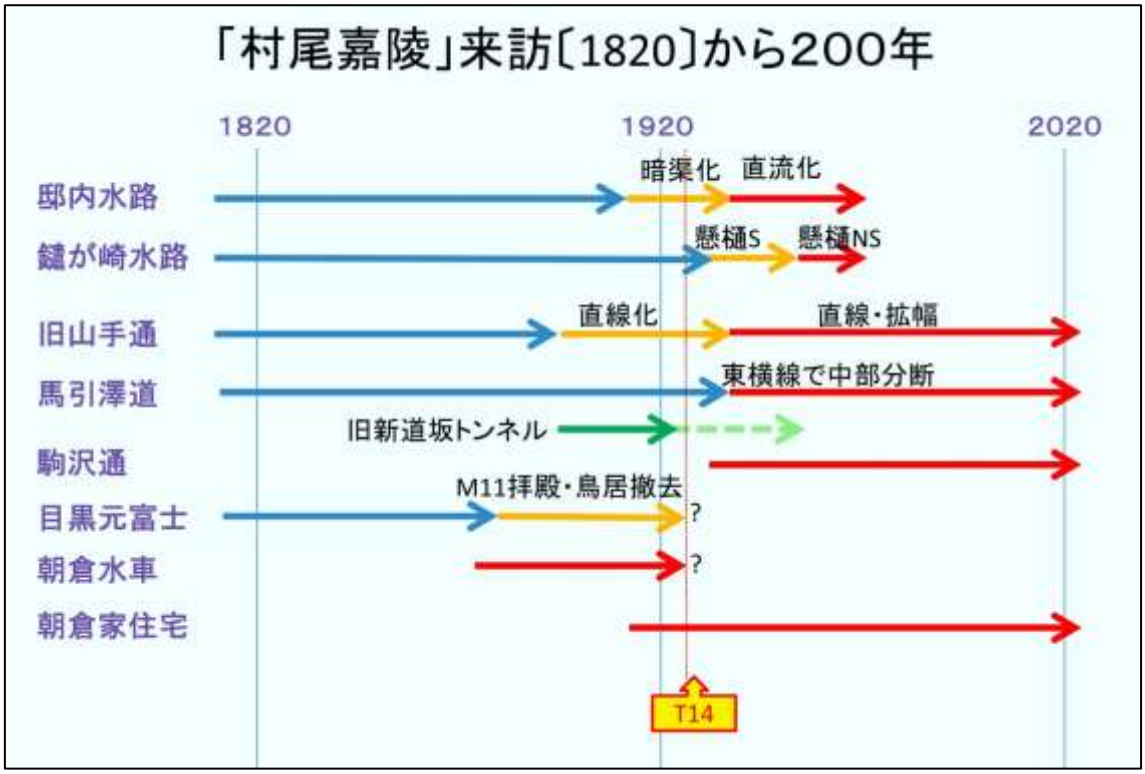
この代官山を中心とする地域は、嘉陵の「道しるべ」や錦絵だけでなく、用水などに関する過去の「資料の宝庫」といえる。その利点を活かす必要があるし、また３ＤＣＧなどによるヴィジュアル化も想定できる。例えば、現・ヒルサイドテラス内の「道路史」と「水路史」などを追ってみると、明治の終わりに、朝倉家が新道路用地を東京府に寄付し、逆に東京府が旧道路用地を朝倉家に下付している。次に、大正末から昭和の初めにかけて用水が鉄筋コンクリートで暗渠化されると同時に直線化されたことによって、今のヒルサイドテラスの敷地が一まとまりになったことがわかる。過去にも現在にもつながる面白いポイントである。

3.　おわりに

代官山では今「緑の十字路」構想が提示されているが、この地は「人」「水」の十字路でもあったとも言える。

宮益澁谷金王邊圖　嘉永4〔1851〕年に水路・往還名等を補入

「江戸近郊道しるべ」を書いた村尾嘉陵がこの地へ来て、先にあげたようなスケッチを書き残したのが 1820 年。オリンピックの 2020 年はそれからちょうど 200 年となる。この歴史の中で、過去と現在の特徴的な景観要素がすべて揃っていた、ちょうどその真ん中の 1920 年前後が、この地がいわば近世から現代に大きく変わった潮目といえ、大変興味深い時期といえる。



〔参考資料〕(公財)後藤・安田記念東京都市研究所< http://www.timr.or.jp/>蔵
大正 14 年 1/10000 地形図「三田」
<http://www.timr.or.jp/library/docs/mrl1003-01-13.pdf>

一部：講演会・ステキサロン

２．近代文学の空間としての三田用水　　きむら　けん

三田用水については興味深い逸話がある。この水を使っていたというお屋敷の台所で鮎が樋から出てきた。この話は、想像力を刺激する、多摩川から下ってきた魚が三田用水の取り入れ口でどちらに行こうか迷った揚句、右に曲がってついには樋から躍り出て女中さんをびっくりさせた。この話、用水の尾根筋物語を知らないと分からない。

私自身、下北沢一帯の土地の文化を調べている。この過程で三田用水と玉川上水がオメガ状にループして窪地を避けていることに気づいた。背尾根を通っていくのが用水だとこの時知って感動した。これを開削するときに夜に線香を点して、こっちだあっちだと言って高低差を確認しながら用水を作っていった。線香測量の話には深い感銘を受けた。

近代文学では、国木田独歩が三田用水を描いている。まず、『武蔵野』（配布資料①）の一節で、「水流林より出でて林に入る」はまさしくこれである。次に『わかれ』（資料④）である。これには「流れの音もなく走る」とある。一方、『武蔵野』（資料②）では、「水と水とがもつれてからまって、揉みあって、みずから音を発するのである。何たる人なつかしい音だろう！」と描く、これは玉川上水だ。なぜ三田用水は音がしないか。こちらは幅が狭く、林の間からすっと出てきて、そして流れては消えていく。その流れの風景に独歩は魅力を見出している。こちらには無音の音楽が流れていたようだ。

国木田独歩の『武蔵野』（資料③）の一番の肝は「言葉を換えて言えば、田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるような物語、小さな物語、しかも哀れの深い物語、あるいは抱腹するような物語が二つ三つ其処らの軒先に隠れていそうに思われるからであろう。さらにその特点を言えば、大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とがここで落ちあって、緩かにうずを巻いている」だ。この都鄙境の詩情がまさに三田用水にはあった。

まとめ：

町はずれを流れている三田用水は、水流と物語の渦を巻きながら流れる。こぶりながらも流れはダイナミックだった。あちらの林の影に忽然と現れ、向こうの木陰に忽然と音もなく消えていく。国木田独歩は川辺に座り、飽くことなく流れを見つめた。その躍動的な流れに見入った。玉川上水とは趣を異にする流れだ。「木の葉は浮かびて流るるまっすぐの水道」と彼は描いた。直線的な流れを浮きつ沈みつしていくもみじ。それらは彼を思索させ刺激も与えた。その紅葉は想い人の投影だ。作品結末にはその恋の行く末を、運命の力強しとも描いた。哲理の果ての思いでもある。

川を見つめてエッセイを書いたのは鴨長明である。「ゆく河の流れは絶へずして、しかももとの水にあらず。 よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」これに比べると三田用水は流れが恐ろしく速かった。澱みなどない、現れたらすぐに消えた。用水に流れゆく彼女の面影、それすらもたちまちに失せてしまった。三田用水は近代の非情（常）なる無情（常）の川だったか？

第二部：懇談会

１．司会を終えて『三田用水雑記』　藤森　高司（DSI 理事）

　貴重なセッションを有難うございました。先生方にまず感謝申し上げます。
さてこれからは参加された 30 名による懇談会です。今回の会合ではステキ総研メンバー15 名のほか、三田用水に関心をお持ちの方、ご専門に研究されている方々、多士済々でした。特徴的だったのは、DSI の方の中で子供のころに三田用水で遊んだ経験をお持ちの方が６～７名いたことです。かくいう私もその一人です。残念ながら懇談会記録は残せませんでしたが、盛況に終えたことをご報告致します。以下、私の「三田用水雑記」を記します。

　私は昭和 19 年 1 月に槍が崎の「空中水路」を見上げる処で生まれました。その辺りは現在の恵比寿南、西の一角で、昔は下通り五丁目といいました。
江戸時代には周辺の武家屋敷の建築営繕を預かる大工、鳶職、瓦屋、左官屋、植木職人達が集まる職人町でした。その中に田丸家、現在の造園業東光園（DSI 会員）の敷地がありました。その庭には三田用水の分水が曳かれ勢い落ちる分水が水車を回し池には錦鯉が跳びはねていました。子どもたちは跳びはねる鯉を見て驚きの声をあげていました。朝倉邸の広大なお屋敷は昼でも鬱蒼とした所で、子ども達は藪を乗り越え、遊びに侵入しました。森にはカブトムシや蝉、トンボなど昆虫の宝庫でした。その森に三田用水が流れ隠れしていたのです。熊笹、芦、シダやツワブキの類いが生い茂りその流は槍が崎の山と山に懸かる「空中水路」（いわゆる土管）に通じていたのです。
今でも三田用水の水の冷たさや流れの音が脳裏を刺激し記憶を呼び覚まします。こうして昔を想い出しているうちに一つの詩が浮かんできましたので散文詩にまとめました。
　ロマンあふれる水の流れが聴こえて頂ければ幸いです。
作詞　藤森高司

『空中水路』

ある日、空に流れる川を見上げて生まれてきました。

空に流れる川と丘にはきいちごの白い花、山吹の花が咲き乱れ良い薫りです。
空に流れる川は冷たく、静かにしかも鮮烈に流れすぎました。

夏になると空に流れる川にはハヤ、カワエビ、タニシが誘い、連れてゆきます。
夢中になって遊ぶうちに夕陽が赤々と染まり陽が沈みました。

空に流れる川の冷たさがやがて夏の終わりを告げ、吹く風の薫りと
清らかすぎる川の冷たさで鳥肌がたつのです・・・。

そっと目を閉じると瞼に残る風景がただただ残るだけ・・
時代は代わり武蔵野の面影は消えて行きます。

時代は変われども鮮明に佇まいは思い出されます。
今も、今も、今も、これからもいつまでも・・これからもいつまでも・・

（第一部資料）　　2016 年　9 月 21 日

三田用水の概要

木　村　　孝

三田用（上）水沿革

1658～60	万治年間	細川上水開削
1664	寛文 4	三田上水開削
	（取水圦は、細川	参照：三田用水普通水利組合「江戸の上水と三田用水」同／S59・刊
1689	元禄 2	同追加普請
1698	元禄 11	白金御殿のため白金村で分水
1702	元禄 15	白金御殿焼失・同分水廃止
1719	享保 4	下澁谷道場池・田子免池に分水
1722	享保 7	細川・三田両上水廃止
1724	享保 9	三田用水普請
1880	明治 13	目黒火薬庫用水通水
	（取水圦は、約 16m上流）	
1890	明治 23	水利組合条例制定
		→三田用水普通水利組合設立
1902	明治 33？	水路幅拡張
1927	昭和 2	新取水圦完成（火薬庫と共用）
1935	昭和 10	取水口→大日本麦酒暗渠化完成
1940	昭和 15	大日本麦酒下流暗渠化完成
1949	昭和 24	土地改良法施行
1952	昭和 27	三田用水普通水利組合法定解散
		←土地改良法施行法§9→§32
		「三田用水事件」訴提起
1961	昭和 36	「三田用水事件」第 1 審判決
1967	昭和 42	「三田用水事件」控訴審判決
1969	昭和 44	「三田用水事件」判決確定
1975	昭和 49	通水停止
1985	昭和 59	三田用水普通水利組合清算結了

上水／用水の基礎的事項

上水と用水

基本的に
上水＝主として街場の呑水
原則として、農業用水には使えない。ただし、余水などの使用が許されることもあった
用水＝主として農業（とくに田）用水
「飲んではいけない」わけではない。しかし、上流で野菜やさらには肥桶を洗っている可能性もある
これらは、上水では厳しく取締られていた。ただし、神田上水は、もともと田んぼを通ってきた水

凸用水と凹用水

凸水路＝丘陵の稜線付近を流す上／用水
玉川上水、三田上／用水、千川上水、（一応）品川用水など
周囲より高い位置を水が流れるので、分水するのに便利、周囲の排水が流入しにくい
ただし、自然河川から取水しているので、川から稜線の上まで水を「上げる」必要がある
玉川上水＝勾配をうまく利用。神田上水＝（大洗）堰で水位を上げる〔文京区関口〕
凹水路＝自然河川に水源の水を流し込んだ用水に多い
北澤用水、烏山用水（ともに目黒川の源流）など
周囲より低い位置を水が流れるので、小規模な勾配利用や堰で水位を上げる必要がある

自然流下

現代のようなポンプがない
→上流から下流に向かって適切に勾配を設けて水を流す必要がある

しかし、自然の地形は「都合よく」できてはいない
地面を掘り下げた水路（白堀）　に加え木製の樋（白樋、箱樋）、土手（築立場）、トンネル（胎内堀）、水路橋（懸樋）、逆サイフォン（伏越）などで、勾配を調整した
→余った水をどこかに流す（落とす）必要がある
三田用水の場合、公式な終点は白金猿町（港区白金台 2）。実際には、台地上のここから南南東方向の自然河川につないで目黒川に落としていて、その水路も三田用水普通水利組の管理下にあった

大堀／外堀　と　内堀

大堀／外堀＝用水路の本流
内堀＝本流から分けた水の流れる分水（自然河川でいう「分流」）
組合村全体の利害にかかわるのは、大堀の水路とその内堀への分水口（とくに位置、大きさ）
→組合全体で決定する必要
分水口から下流の内堀の利用・管理については、他の内堀関係者などの利害にかかわらない
→個々の内堀ごと、あるいは一定範囲の内堀ごとに「内堀水利組合」を作り、その関係者だけで、必要事項を決定していた。
三田用水普通水利組合の場合、水利組合條例施行にあたり、東京府の指導で
渋谷村、目黒村、大崎村、品川町　ごとに内堀組合が設置された
世田谷村では、旧代田村のみが組合村だったためか、内堀組合が設置された形跡はない
しかし、同村のための「内堀」である山下、溝ケ谷の両分水については、いちいち組合全で審議・議決するのは煩雑に過ぎるので、上記の内堀組合同様の「自治」が認められていと考えられる。

―以上―